

目的 老いと死をめぐる問題は、高齢化社会においてはとりわけ重要な問題である。親の老いと死を子供がどう受けとめているかという面から、実の親と子の関係に焦点をあてて、その問題を明らかにすることにした。そこで、老年期において配偶者と死別した後の親の生活変化と親子関係に生じた変化、情緒的統合への片親死別の影響、老親の再婚への賛否の意識などを把握し、息子と娘の受けとめ方の差異を比較した。さらに、親への役割観と子供への期待の双方から老いと死の看とりについての意識の変化を探った。

方法 福岡市と宗像市の公立の高校と中学校の生徒の父母を対象に、1989年12月に調査を行った。回収した調査票の中から、夫と妻のいずれもが片親または両親ともに存命で、親の年齢が60歳以上という条件のもとに、269組の夫婦を選びだし分析の対象とした。片親死別後の親子関係については、死別後年数や死別時年齢を考慮して分析した。

結果 配偶者と死別後の親の生活変化についての認知では、息子は娘に比べて変化なしという者が多い。一方、死別後に親の健康や生活への気遣いが増えたという者が娘では7割、息子でも6割いるが、具体的な行動面での心配りはいずれも乏しい。親に対する情緒的統合欲求についても予想に反して、娘の方が息子よりも親を思いやる気持が強いとはいえず、両親存命と片親死別の看とで差があまりみられないことが、息子と娘に共通する特徴としてあげられる。そのことはおそらく、老親の再婚に対する反応が意外に少ないことに加えて、既婚子との同別居や介護形態や老人ホームへの入所や遺言の必要性などの面からみた、老いと死の看とりについての意識の動きとも関連があるように思われる。